フレーベルの神性論（1）
―― 子ども観からみたフレーベルの神性に対する認識 ――

Frobel's Divinity Theory (1)
Recognition of Frobel's divinity from view of children

渡辺 直人

Naoto Watanabe

要　約

フレーベル思想の分析において神性論は重要な鍵となっているが、現在では整理された文献が見当たらず散見されている現状である。本研究ではフレーベルの神性論の整理・及び体系化を目的とし、本報では第一報としてそれら情報の収集・集約を目的とした。

神性に関して、元来人間は神の似姿として創造されており、フレーベルは人間の本質を神性と定め、そして「創造性」を人間の神性の特徴として位置付けていることがわかった。また、フレーベルの神性論をさらに探るにはフレーベルがどのように子どもを捉えていたか、すなわちフレーベルの「子ども観」を見出すことが重要である。フレーベルが持っていた子どもに対する認識について、「幼児における神性の無垢性・純粋性」、「無垢・純粋への回帰」、「神性・創造性の発達」という3つに分けられた。

1. 研究の目的

我が国において現在の就学前教育といえば、主には幼稚園・保育所・こども園を指す。そしてこの幼稚園の源流はドイツにあり、フレーベル（Friedrich Wilhelm August Fröbel, 1782年4月21日-1852年6月21日）が幼稚園（Kindergarten）の創始者としても知られている。

世界において、就学前教育はオーウェン等によってフレーベル以前から行われていたものの、幼児教育の発展にはフレーベル、そして幼稚園の存在は欠かせない。過去をみると日本では1875年に柳池小学校の幼稚部、1876年に現在のお茶の水女子大学附属幼稚園ができた[i)]。

幼稚園の誕生以降、少し遅れて保育園も誕生した。当初、保育園は福祉的な色合いが強く都市化により勤労者が集中し、それに伴い頼れるものがおらず勤労も厳しかったことからの救済措置の一環として誕生した[ii)]。しかし現代では幼稚園に準じている点が多く、保育所保育指針の主な内容も幼稚園教育要領と比して遜色ない。これらのことからも幼稚園ないしその根元となったフレーベルという存在は我が国の幼児の保育・教育の発展に大きく寄与してきたといえよう。

これらの発展の土壌には、何よりフレーベルの秀逸した教育哲学観があった。彼の洞察は極めて深く、今もなお多くの研究者によって足跡が辿られている。19世紀後半においてはフレーベルの真の意を汲めず、単純に恩物を与えるだけなど形骸化した指導が多く[iii)]、デューイなど児童中心主義者、経験主義者から批判されている[iv)]。しかしながら、批判は受けたもののフレーベルの評価は変わることはなく、今でもなお寓意に満ちたフレーベルの手記は大いに参考にされており、彼に関する文献も数多く挙げるに遑がない。

彼は幼児教育で名を残した人物であるといえるが、その生涯の中で、今にまで影響を及ぼしているものを開発している。それが上述した恩物である。恩物は紛れもなく彼の名を大きくした遊具であり、今でこそ導入している園は少ないだろうが、当時の日本ないし世界の幼児教育界では多くの園で導入されていた教育的遊具である。

そして何よりこの恩物はフレーベルの思想、教育哲学を体現させたようなものである。フレーベルは上述したよう

幼稚園の発展という役割を担った。このことからも「教育者」のような印象を持つものが多いが、実際のところ教育者としての評価よりも思想家、哲学家としての評価が多く、故にその方面からの分析も多い。そして彼の思想はどれも「神性」と少なからず関連しており、ゆえに彼の思想分析においては神性の理解が前提として必要であるといえる。

しかしながらこの神性に関する論考は散見される。フレーベルの思想を叙述する上で、説明的に神性に関して述べられるのがほとんどであり、情報量も多いとはいえない。また、神性論を主題とした論文を、Cinii Article で「フレーベル　神性論」と検索したところ、ヒットしたのは0件であった。このことからも、フレーベルの神性論はこれまで主要な研究対象とされてこなかったといえる。

以上、現在では神性を主題として述べている論考の少なさ、そして今後のフレーベル思想研究の発展のためにも、散見されている神性に関する論考を集約させる必要があると考える。そこで本研究では、今後のフレーベル研究の一助となるべく、散見される情報を集約し、それら論考の整理および神性論の体系化を目指す。また、本報は第一報として、散見された情報の収集・集約および各論考における考察の報告とする。

2. 思想の背景

フレーベルは現在のドイツに生まれ育った人物である。当時のヨーロッパは（ロシア帝国領やオスマン帝国領等を除けば）宗派はあれどキリスト教を信仰する国でがほとんどであり、このような宗教的風土であった土地で育ったフレーベルも、当然キリスト教的宗教観を持っていたであることは想像に難くない。

彼と宗教の関わりについては、まず第一に家族構成や生涯からもみてとれる。彼の父、ヨハン・ヤーコプ・フレーベルは、旧ルター派の牧師である。父親は厳しく律する人物であり、津守は「厳格にして真面目な人間だった。朝晩家族の全員が集まり、礼拝が行われたこの時間はフレーベルを宗教的瞑想へと誘い、彼の宗教的感情を培った。」と述べている[v) vi)]。このような父親なため、フレーベルも宗教的生活を求められており「基督を身に体し、キリストの生活を実現する」ことを度々いわれていたとされている。

また、同様にフレーベルの通っていた小学校も、この宗教性の涵養につながっているといえよう。この小学校では週の初めに聖書を一章ずつ暗記させられていたという。

> 「此の女子学校への入学は彼にとつては『一層高い精神生活への誕生であつた』。此の学校では毎週聖書の文句を一生ずつ暗記することになつていた。最初の週に彼に決められた文句は、マタイ伝第六章の「汝先ず神の国を求めよ」云云の一句であつた。此の句が荘厳な調子で唱えられる時、彼の心の中に深く生命の基礎と救済とを印象づけられた。そしてずつと後年になるまで此の印象は生き生きとして保たれて、彼の心に勇気を与えた。」[vii)]

これらのことからもフレーベルは幼い頃から宗教性が培われた。彼の生活の至る所にキリスト教的観念があり、それらに影響・刺激され、そして涵養されていったといえよう。また、このようにキリスト教と密接に関わりがある社会で生きたフレーベルにとって、キリスト教観は思想にも多く影響を与えている。

フレーベルは教育者として名を残した人物の中でも卓越した思想家ともいわれる。実際に野原（2002）も「フレーベルの思想はあまりにも哲学的[viii)]」であると評している。そのフレーベル思想であるが、それは「神性論」にて顕著に表れている。以下で神性論を通してフレーベルの思想も叙述するが、宗教観と思想を区別しようともできないほど織り混ざっているといえる。ゆえに、フレーベルの思想は「宗教観的教育・発達論」ともえよう。先ず、以下で神性に関して述べる。

3. フレーベルの神性論

上述したよう彼の思想を探る上では「神性」というワードが重要となる。そしてこれを紐解くには背景にあるキリスト教的宗教観を理解しなければならない。

まず予め述べておく必要があろう「神性」の意味であるが、これは辞書的には「神的なもの。神的な性質を帯びるもの。」といえる。この定義を見てもわかるよう、具体的かつ特定な何かを指すものではなく、極めて広義的である。そしてこのような広義的な意味合いの上に、フレーベルの神性論は立脚している。そしてその「神性論」である

が、これは「現状や動体を神性の視点で解釈すること」といえよう。

この神性論を考察する前に、神とはどのような存在か、そして人間とはキリスト教的視点からどのように捉えられるものなのかを述べる。まず、神は「絶対的」な存在として位置付けられているのは多くの宗教においても概ね前提とされているところであり、キリスト教でもこれは同様であろう。一方で神は「どのような力」を持つか。これに関しては（絶対的であるがゆえに言葉で、そして簡潔に言い表すこと自体が不可能ともいえるが）端的に言い表すのであれば「すべてを創造する力」といえよう。ゆえに神は、万物の「創造主」ともいわれる。当然ながら、人間も神に創造されたが、しかし人間にはとある特徴がある。フレーベル自身も述べているが「神は、人間を、神自身の模像を、創造した。[ix)]」というのである。すなわち人は「神の似姿」といえる。

神の似姿として創造された存在である人間は、神のように創造を行える立場にあるとキリスト教的には考えられる。すなわち「創造活動」は、人間が有する神性の一つと捉えることができるであろう。フレーベル自身も「神は、人間を創造して、これに神の像を与えた。それゆえ、人間は、神と同じように創造し、同じように活動しなければならない。[x)]」と述べている。宮崎（1991）も同様に「フレーベルのいう『神性』とは、自己創造的な本質としての神性、すなわち自ら創造してやまない実在[xi)]」と述べている。また、これは「神への合一傾向」（子どもが生まれながらにして宿している神性を顕現する使命を持ち、神が宇宙の万物を創造したように創造活動をしなければならないこと）とも呼ばれる[xii)]。

しかし、一概に「創造性＝神性」とはいえない。フレーベルは神性を「万物に宿る」と考えており、人間のみならず、全てのものの本質を「神性」と捉えている。この「万物に宿る」という考え方を「万有在神論」と呼ぶ。

フレーベルがこの「万有在神論」者であるのはよく知られているところであり、万有在神論とは「神は、万物を超越して万物を支配し、また神は万物に内在して万物の本質を形成している。万物は神から現れ、やがて神に帰っていく。[xiii)]」と説明される。

この意味に関して、神という存在は、上述したよう絶対的な存在で、創造主でもある。あらゆるものが神に創造されたものであると上述した通り、すなわち万物を創造した神は当然ながら万物を支配しているともいえ、全てのものは神のものであり、全ての本質は神性であるといえる。

万物が神性を本質に持つといえることは、人間も同様であるといえる。ゆえに上述した「創造活動」が「人間の神性の特徴」とある以上、事物それぞれに異なる特徴的な神性があるとも解釈できよう。

以上、フレーベルはこのように神性を捉えていたと考えられる。しかし、ここで振り返るがフレーベルはこのように思想家・哲学者としての一面も持つが、彼は幼児を対象とした教育者でもある。だが、なぜフレーベルは教育対象として幼児を選んだのだろうか。この理由に関しては彼の子ども観からわかるが、この子ども観こそ彼の神性論を紐解く上で重要な鍵ともなる。実際に、彼の思想や論は神性との関連が多く見受けられる。神性論を考察するうえでは、彼が立脚した論や思想から「帰納的」に考察することで、神性の具体的な範囲が明らかとなると考える。そこで、以下ではフレーベルが幼児に対してどのように考えているかを説明する。

4. フレーベルの子ども観

神性は万物に宿るという考えのもとフレーベルの思想は発展してきた。しかしながらこのような神性論において、幼児とはどのような関連があるのだろうか。

元来、フレーベルは児童を神性なものとして見てきた。特にフレーベルの児童神性論はフレーベル思想でも有名であろう。フレーベルは「万物は永劫の理性が秘められている。従って幼児、児童のうちにも永劫の理法が宿っていて、その永劫の理法が神性である。だから幼児、児童の本性は神性である。[xiv)]」と述べており、兼ねてから幼児に注目していることはわかっている。ただし、神性を発達させるだけであれば対象は幼児でなければならないとはいえず、幼児以外の青年・成人・老人でも可能のはずである。だが、なぜフレーベルは幼児に着目したのか。以下ではその理由に関して検討したい。

フレーベルの生涯から見ても、彼が教育に出会ったのは偶然の賜物である。例えば、倉橋惣三のよう、少年期から幼稚園に通いつめており[xv)]「かねてから幼児に興味を持っ

ていた」というような、いつの日からか自然と幼児保育・教育に心が向いていたというものではない。フレーベルがグルーナーから教職を勧められる以前は秘書の仕事を辞め、建築家を目指している真只中であった。ゆえにこのグルーナー校長との面会がなければフレーベルが教育の職につく可能性は低かったであろう。これらのことからもフレーベルは実際に教職に就いて勤労していく中で子どもという存在、保育・教育・幼児に興味を持ったともいえよう。ルソーを学んでおり少なからず子どもの発達心理に一目置いていたことは想像に易いが、彼自身の気持ちが固まったのはその時からではないだろうか。

以上のように後年での経験から子ども、教育に興味を持ったことが推測されるが、フレーベルはどのように「幼児」の教育や存在の重要性を理由づけしていたか。これ関しては大きく分けて3つの理由が存在する。それが「幼児における神性の無垢性・純粋性」、「無垢・純粋への回帰」、「神性・創造性と発達」の3つである。

（1）幼児における神性の無垢性・純粋性

ベビー・スキーマとあるよう乳幼児は可愛く思われる存在ともいえよう。実際に子どもを観察すると、多くのトラブルを生み出すこともあるがそれを帳消しにするほどの愛おしさ、可愛らしさ・純粋さがあるだろう。（ベビー・スキーマというものは基本的に見た目の印象による効果といわれるが）しかしながら幼児の「可愛さ」というものは見た目だけではなく、その純粋性・無垢性をも合間って構成されているのではないだろうか。

この幼児の無垢性はフレーベルをも魅了したに違いない。しかしながらそこで止まるのではなく、フレーベルはこの無垢性をも哲学した。野崎（1974）は「神によって生命を与えられ、その本質を保持するものと考え、或は、その神が人間の本性の中に働いておるというのである。この本質的な働きを最も純粋な姿として所有しておるのは幼児である。幼児こそ神の本源たる神性の萌芽である。表微である。[xvi) xvii)]」（下線は筆者）とフレーベルは考えていたと述べている。矢野（1985）も同様に「人間の本質を神性と捉えるところから原罪の観念が否定され、しかも、まだ世界の悪に汚されていない子どもは、神性を損なわれておらず、無垢性、健全性を保持しているのであり、そこにおいて既に無垢性を失なったおとなよりも優れた存在であるともいえるのである。[xviii)]」（下線は筆者）と述べている。

このように、フレーベルは神性と無垢性を関連させて考えており、幼児の無垢性は「神性が変化していない」、「損なわれていない」ことを示す根拠として捉えていたことがわかる。そして神性が完璧な幼児は、神性が少なからず変化している大人よりも優れており、だからこそ優れたものである幼児に着目したのではないか。

（2）無垢・純粋への回帰

他にも視点が存在する。次に説明するのが「純粋への回帰」という理由である。これは「幼児の無垢性」を前提とし、さらに「神性が純粋ではない大人」を基準とした考えであり、ボルノーやウルリッヒの考察から垣間見ることができる。ボルノーは「人間というものは自分の本来の性質を、その埋没されている根源への回帰によってはじめて獲得できるものであること、この『根源』は決して時間程意味で発端にあるのではなくて、さしあたり与えられている『非本来的な』状態に対しての明瞭な反対運動のなかで、はじめて獲得されなくてはならないものであること、……このことを教育の領域のなかで、フレーベルははっきりと認識した。根源への回帰は彼の全教育学の根本思想であり、しかもそれは単に子供の教育に関してだけではなくて、子供を真に教育するなかで成人もまたふたたび若返ることに関しても、そうなのである。[xix)]」（下線は筆者）と述べている。ウルリッヒも同様に「子どもとの遊びや会話において、大人もまた、彼らの中に埋め込まれている内なる子どもへと回帰し、同様に大人たちもまた神聖で完全なものへと戻ることができる。大人たちは自ら『全面的な生の合一』（フレーベル）へと立ち戻り、精神と事物に関する、精神的ー神性的な全結束生を体験するのだ。[xx)]」（下線は筆者）という。このように、フレーベルは子どもと関わって行く中で、すなわち子どもの純粋さに触れることで、自身の精神性が若返ると考えたのである。ただし、その若返りを「一つの効果」として考えていたのか、それとも子どもとの触れ合いを、子どもの成長ではなく、自身の「若返りを目的」にしたものとして考えていたのか、これは先行研究にはない。

しかしながら、いずれにせよ子どもと触れ合う利益という側面から子どもという存在を検討している。そしてこの思想に関して矢野（1985）は以下のように分析している。

「子どもの無垢性に触れることによる人間性の回復は、ロマン主義にみられるテーマの一つであった。そこには現在の生、分割され、歪められ、損なわれた生への根本的批判があり、その批判の根拠として未分化で無垢で健全な子どもの生が対比されている。―（中略）―フレーベルは単に批判の軸として子どもを定立させるのではなく、子ども＝根元的な人間の生にふれること、共に生活することによっておとなの性を淳化させ若返らせるのだと考えている。子どもとの生活は大人から多くの悪や劣悪さを除去する。[xxi) xxii)]」（下線は筆者）

以上、矢野の解説を引用した。子どもは無限の将来性や能力を有し、そしてその無垢へと回帰させてくれる（純粋回帰に導いてくれる）存在としても役割があるとフレーベルは考えており、子どもという存在に着目したことがうかがえる。

そして何よりこの思想はフレーベル自身の主張であると同時にロマン主義的な考えでもあったという。このロマン主義の風潮はフレーベルも多分に影響されていたであろうことからも、一概にフレーベル独自の主張とは位置付けられない。しかしまたフレーベルも同様に考えていたという点は否定できないものでもあるため、フレーベルの子どもの捉えの一つとして数えられるのではないだろうか。

また、これは「大人の視点」から述べられていることも事実である。現在のような教育観（子どもを将来の社会を担う存在として認め、教育を受ける権利がある、等といった子どもの人権・権利を認める観念）はまだないこともうかがえる。

他、ルソーとの類似点も垣間見える。この当時にはルソーも、そして彼の著『エミール』も有名であり、当時の西欧における社会観念に少なからず影響を及ぼしたに違いなく、そしてフレーベル自身もその影響を受けていたことも想像の域は出ない。

（３）神性・創造性と発達

３つ目の視点が神性・創造性と発達である。上で説明したよう神性は万物に宿り、当然ながら人間にも、幼児にも宿っている。そしてそれぞれに神性の特徴は異なり、神の似姿として作られた人間は、神のように創造する力こそ人間の神性の特徴と考えられる。そして、神性はそれぞれ事物毎に異なる特性を持つと考えられるが、人間の神性は先行研究からも「不変的」なものではなく「可変的」なものであることがわかる。フレーベルは「人間のなかにある神的なもの、すなわち人間の本質は、教育によって、人間のなかに展開され、表現され、意識化されるべきであるし、またとうぜんそうでなければならない。[xxiii)]」（下線は筆者）と述べており、「人間の神性」は、教育によって発展するとフレーベルはいい、これはすなわち可変的であること、そして発達の余地があることが示唆されている。

ここで、改めて神性について検討したい。人間の神性の特性とは「創造性」であると上述したが、では「創造性の発達」についてはどのようにいわれているのであろうか。創造性の発達に関するフレーベルの認識について野崎（1966）は、この神性、すなわち創造力を高めることこそが、教育の中心課題の一つであったという[xxiv)]。青木（2017）も同様のことを述べており、「フレーベルによれば、神は万物を創造し、人間の内にも「創造する」という本質を与えた。したがって人間の教育は、何かを作り出したいとする衝動（形成衝動：Beschäftigungstrieb）を大切に守りながら、育てていくことを使命とする。[xxv)]」（下線は筆者）といい、これもまた教育されゆくものであるとしている。さらに矢野（2012）によれば「フレーベルの意味する神性とは完全無欠のものではなく、自己創造的な本質としての神性である、とされている。また、この創造力は人間の最も若い日、つまり幼児期から涵養されなければならないともされている。[xxvi)]」（下線は筆者）と述べている。これらのことからもフレーベルは、神性・創造性は幼児のうちから育てていく必要があると考えていたことが示され、すなわちこれが、フレーベルが子どもに着目した理由の一つとして数えられるであろう。

神性、すなわち創造性を伸ばすことに重きをおいたフレーベルだが、彼は子どもという存在・特徴をどのように捉えていたのであろうか。野崎（1966）によれば、フレーベルは元来から幼児を「創造的な存在」[xxvii)]と捉えていたと

述べている。一方で子どもより大人を「創造的な存在」であるとフレーベルが捉えていたことを示す先行研究は筆者が探った以上見受けられない。これはすなわち、幼児は、大人にはない、幼児の大きな特性として「創造性」があること、また大人と比し子どもは創造性が顕著にあらわれていることが示唆されたといえよう。

以上、これらのことから3点のことが浮き彫りとなった。それが「発達の余地がある存在」であることと、「神性・創造性の発達において幼児期からの教育が必要」であることと、幼児を「創造的存在」として捉えていたことであり、すなわちこの3点がフレーベルが幼児に着目した理由の一つともいえ、そしてこれらはフレーベルの神性論を構成する要素の一つといえる。

5. 結語として

以上、神性・神性論、そしてフレーベルの子ども観に関して述べた。神性は万物に宿るものであり、それぞれにその神性の特性は異なるということ、そして、神の似姿として作られた人間は、神と同様「創造性」という神性を持つことを示した。また、子ども観では「幼児の無垢性」、すなわち、幼児は無垢であるため、大人の「純粋への回帰」、「神性・創造性の発達」といった理由から子どもに着目していたと考えられる。そしてこれらすべての共通点として、神性が関連していることも見受けられた[xxviii)]。

しかし彼がなぜのこのような哲学的思想を立脚できたのだろうか。まず、彼は自然科学・鉱物学に興味を持っていたことも彼の生涯見て取れ、研究助手として勤務した経験もあり、これらのことからも科学的知見は豊富にあったことが窺える。彼が自身の持つ哲学観を維持・整理し、表現できたその背景としては、キリスト教という形而上観と自然科学という唯物観・科学観が相反しなかった結果であるのではないだろうか。そしてこれは彼自身の努力もあろうが、啓蒙的であるロマン主義という自由思想を促進させる風潮が社会観念にあったからこそであろう。

当時はキリスト教も絶対ではなく、解釈に余地があったようである。実際に津守（1951）は「此の頃長兄のクリストフは大学に在学し、神学を学んでいた。父は旧式の神学者であり、兄はその頃盛になりつつあつた批判哲学に影響され教義に対しても批判的な態度を持つていた。[xxix)]」ともある。このような環境や風土があったからこそフレーベルの哲学観は醸成されていったといえよう。

しかし一方で課題も浮き彫りとなった。第一に、児童神性論ではルソーの思想も垣間見えるほか、ロマン主義も彼の思想に影響しているということからも、ルソーがどのように当時の社会に受け入れられ、それがどのように発展していったか、また当時の社会観念や哲学観を探り共通点を見いだすことも今後の課題となりうるだろう。

神性論においては、フレーベルは人間の神的なものを育むために教育を要すると述べており、さらに子どもの根元を善とみており、子どもを悪くするのは周囲の大人であると解釈している。これはすなわち神性は人間の性格にまで影響を及ぼしていることを示唆している。創造活動のみが神性で、これらを伸ばすために教育をするという解釈ではない。人の神性の「範囲」を今後の検討事案として求められるだろう。

以上、本報では子ども観を交えて神性論にまつわる情報を提示および考察してきた。本研究ではフレーベルの神性論の体系化を最終目的としているが、本報は第一報であるため情報の収集・集約と各論考の考察のみの報告にとどめる。これら論考の具体的な整理やまとめ、論の体系化は第二報にて行うこととする。

脚注・参考文献

[i] 文部科学省．幼稚小学と幼稚園の開設．https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317591.htm．2021年1月3日取得

[ii] 加藤静・宮本康子・山下祐依（2009）．明治から昭和初期における保育と現代の保育．中村学園大学短期大学部「幼花」論文集，Vol 1，pp.24-36

[iii] 荘司泰弘（1981）．フレーベルの恩物の今日的意味．幼児の教育 80(12)，22-25

[iv] 安部貴洋（2013）．デューイのフレーベル解釈 ―「フレーベルの教育原理」にみるデューイの幼児教育―．八戸学院短期大学研究紀要，第37号，pp.1-10

[v] 津守真（1951）．フレーベルの生涯．幼児の教育 50(6)，pp.49-66

[vi] フレーベルはこの父に尊敬の念を抱いていたものの、快さよりも厳格さの方が勝っていることが見て取れる。後に引き取られる叔父（叔父も牧師）は温かい愛情のもとで過ごすことができたと回想している（津守、1951）。

[vii] ibid.

[viii] 野原由利子（2002）．フレーベルの「恩物」及びモンテッソーリの教具活動の意義について ―最近の脳科学研究をふまえた幼児教育への提言にてらしての考察―．愛知江南短期大学紀要，31，pp.99-106

[ix] (著)F.フレーベル（1964），(訳)荒井武『人間の教育（上）』岩波書店，pp.49-50

[x] ibid.，同項

[xi] 宮崎恵．フレーベル「母の歌と愛撫の歌」における表現教育への一考察．駒沢女子短期大学 研究紀要，第24号，pp.15-20

[xii] 中川秦（1987）．フレーベル恩物の再考：第二類恩物における操作を中心として．美術教育学：美術科教育学会誌，9(0)，pp.67-76

[xiii] 中村弘行（2010）『人物で学ぶ教育原理』三恵社．p.54

[xiv] 野崎信洋（1974）．フレーベルの人間教育の一考察（三）．駒沢女子短期大学 研究紀要，8，pp.87-95

[xv] 乙訓稔（2012）．倉橋惣三の幼稚園教育の理念．実践女子大学生活科学部紀要（49），65-80

[xvi] 野崎（1974）を参照

[xvii] また、野崎（1974）は、フレーベルは幼児を「神の化身」とみなし「幼児の本性の中に、無限なもの、永遠なものを見ようとした。」。さらに「それほどまでに幼児を純粋なもの、或は神的存在なものと幼児を捉えている。」ともいう。

[xviii] 矢野智司（1985）．フレーベル教育論における〈子ども〉の意味：〈願望時間〉としての〈子ども〉．大阪大学人間科学部紀要，11，pp.19-37

[xix] (著)ボルノー（1975）・(訳)西村晧・井上坦『認識の哲学』理想社．p.132

（浜田栄夫（1979）．フレーベルの教育思想と予感．教育学研究，第1号，pp.11-20を参考）

[xx] Ulrich, H.(1999) "Das Kind als schöpferlicher Ursprung" Julius Klinkhardt.. p.354

（青木美智子（2008）．20世紀ドイツにおけるフレーベル思想のロマン主義的解釈をめぐって ―遊戯概念を中心に―．東京大学大学院教育学研究科紀要，第48巻，1-12を参考）

[xxi] F.Frobel：Friedrich Frobel's gesammelte padagogische Schriften, Hrsg. v. W. Lange, Abt. 1, Bd. I, 1966, (Neudruck der Ausgabe 1862 und 1874), S. 89.（(監修)小原國芳・荘司雅子『フレーベル全集』玉川大学出版，第1巻，p.148）

（矢野(1985)を参照）

[xxii] そのほかにも、矢野（1985）は以下のように述べている。

「明確な不動の理想的目標ではなく、このように発展し続けること自体に価値をおくのは、キリスト教の正統的信仰の衰退と、そこに生み出されてきた価値喪失という精神的危機と連関している。信仰にかわるものとして、新たに無限の時間における人間性の発展（神性＝精神の歴史を通しての現実化）という理念が提示されたといってよい。そのとき子どもはおとなが虚無の時間を克服して、有意味な無限時間と結びつき、再び充実した現在（統一された生）を回復するための象徴として位置づけられることになる。子どもはおとなにとって理想的未来を予感させ、認識させ実現させるものとして解されるのである。理想的未来の創造主として子どもを把握することによって、子どもは伝統を受けつぐ存在からむしろ未来を創造する存在へと転換させられることになり、そこから、模倣を中心とする教育方法からフレーベルの創造を重視する教育方法への転換が主張されることになる。このことはまた、子どもの未完成さ、依存性を自立能力の欠如として否定的に捉えることから、新しい世界の可能性を秘めたものとして肯定的に捉えることを要請する。」

[xxiii] (著)F.フレーベル（1964），(訳)荒井武『人間の教育（上）』岩波書店，p.14

[xxiv] 野崎信洋（1966）．フレーベルの人間教育の一考察. 駒沢女子短期大学研究紀要, 創刊号, pp.93-100

[xxv] 青木美智子（2017）．フレーベルの「庭造り」（Gartenpflege）から見る幼児期における栽培の意味. 京都橘大学研究紀要 = Memoirs of Kyoto Tachibana University (43), pp.1-15

[xxvi] 矢野日出子（2012）．幼稚園の歴史を探る. 児童教育学研究 (31), pp.95-109

[xxvii] 元来人間は創造的な存在である、またそうあるべきとフレーベルは考えるが、各年齢段階と比して児童はより「創造的な存在」という意味で用いられていると考える。

[xxviii] 子ども観に関しては、神性を前提として立脚しており、そしてフレーベルの神性の範囲をみるためにも、神性の範囲を探るべく見ていく必要があるということである。いわば帰納的な考察を試みた。

[xxix] 津守真（1951）を参照